

# 岐阜県におけるカラスの罫

梶浦敬一\*・中島 恬

## Roosts of Crows in Gifu Prefecture

Keiichi KAJIURA・Ten NAKASHIMA

### 1. はじめに

ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* とハシボソガラス *Corvus corone* が夜間、集団を形成して一定の場所(罫)に就眠することは古くから知られている(平林1962, 山岸1962, 倉田・樋口1972, 羽田他1966)。

岐阜県におけるカラスの罫と帰罫行動に関しては、現在までに大塚・坂井(1975)が岐阜市で、梶浦・林(1981)が郡上郡八幡町で、窪田(1983)が不破郡関ヶ原町において報告しており、また梶浦(1980)は県内全域の罫の分布について述べている。しかし、これらの調査より10年を経た現在、山林の伐採、都市化などにより大きく自然環境が変化しつつある。当時調査されていない地域も含め罫の数や位置、生息数にも変動があるものと考えられ、再調査が望まれていた。

そこで、筆者らは県内におけるカラスの罫分布・生息数と帰罫行動を解明することを目的として調査を始めた。今回は東濃・中濃地方で調査をすることができた。まだ調査途上であり、十分なものは言えないが現在までに得られた結果を中間報告として報告する。

執筆にあたり、文献の入手に便宜をはかっていただいた日本野鳥の会岐阜県支部事務局長の大塚之稔氏、野外観察に多大な協力をいただいた県立加茂高等学校生物部の諸君に厚くお礼申しあげる。

執筆にあたり、文献の入手に便宜をはかっていただいた日本野鳥の会岐阜県支部事務局長の大塚之稔氏、野外観察に多大な協力をいただいた県立加茂高等学校生物部の諸君に厚くお礼申しあげる。

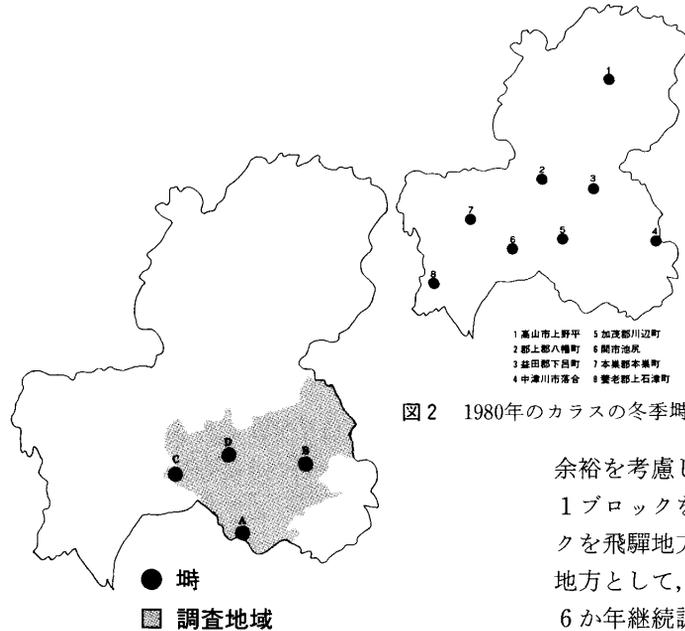


図2 1980年のカラスの冬季罫

### 2. 調査地域と調査方法

調査地域は、調査人員と時間的余裕を考慮し、県内を3ブロックに分けた。第1ブロックを東濃地方・中濃地方、第2ブロックを飛騨地方、第3ブロックを岐阜地方・西濃地方として、1989年より各ブロック2年間ずつ6か年継続調査を計画した。

罫の分布と生息数については3年程で終了することを目標とした。

図1 今回確認されたカラスの冬季罫

\*岐阜県立加茂高等学校

今回は第1ブロックを中心とした調査を行ったが、郡上郡、中津川市、恵南地域については未調査である。調査は、1989年10月～1990年1月にかけて行った。鳩の位置は、午後3時すぎカラスが飛ぶ方向を地図上に記入し追跡して確認した。また、聞き込み等も参考にして位置を探した。次に鳩付近の鳩行動については、鳩の環境、鳩数、飛来の方角を記録した。個体数のカウントは主に2羽を単位として行ったが大群のときは5羽、10羽を単位として度数計を使用し数えた。

なお、鳩においてはハシブトガラスとハシボソガラスが混生しており、場所により両者の個体比も異なるように思われたが多数の個体を瞬時に判別することが難しく両者を区別することができなかった。したがって、今回の結果は両者を一括して扱ったものである。鳩内におけるハシブトガラスとハシボソガラスの個体比などの問題は今後の課題としたい。

### 3. 結果と考察

今回の調査で確認した鳩の場所を図1に示す。

#### 〈東濃地方の鳩〉

梶浦(1980)によれば、当地方の鳩は、山岸(1962)から引用した中津川市落合に1か所が記録されているにすぎない。

##### ・笠原町の鳩

聞き込みによって得られた情報をもとに観察の結果、土岐郡笠原町に2500羽程の鳩を見つけた(図1のA)。鳩は

笠原町の市街地から南西へ約2km離れたアカマツを優占種とした雑木林内にある。近くに町のゴミ処理場があり、愛知県境にも近い。この鳩に集まるカラスは、多治見市街地(北)方向から750羽、土岐・瑞浪市(東)方向から1442羽、南の瀬戸市境にある標高約400mの山を越えて来るものとその山中から飛来するのは合計して18羽であった。この鳩のカラスは、ほとんどが東・北方向の平野部から鳩した。(羽数は調査した4回の平均を示す)

##### ・蛭川村の鳩

恵那市街地からカラスを追跡し確認することができた。鳩は標高約500mのアカマツが混じる雑木林内にあった(図1のB)。この地は笠置山(952m)の東に位置し、三方を約600mの山に囲まれ南側が和田川によって開けている。鳩するカラスは、和田川沿いに、あるいは山裾をぬって南の方向から飛来するものが多い。これは山岸(1962)が指摘したように鳩に飛ぶカラスは、途中にある山などの障害になるものは避け多少迂回しても谷間や川すじを向かうためであろう。

また、瑞浪市土岐町のアカマツ林に12月中旬に800羽程集まる鳩を見つけた。しかし、1月8日に出向いた時には1羽の姿も見られなかった。最後に観察したのは12月29日である。この鳩は山岸(1962)のいう秋鳩と考えられる。カラスはどここの鳩へ合流しているのか今後の課題としたい。

#### 〈中濃地方の鳩〉

##### ・関市の鳩

1980年の調査では中濃地方の冬季鳩は、郡上郡八幡町、関市池尻、加茂郡川辺町の3か所が報告されている。このうち関市(図1のC)と川辺町(図1のD)の鳩は、今回の調査でも同じ場所に確認することができた。関市の鳩は、大塚(1975)が観察した当時は岐阜市の清水山にあったものが、数年後に現在の場所へ移動したものである。2か所間の距離は、直線で約8kmしか離れていない。鳩へは、武芸川町(北西)方向から747羽、美濃市(北)方向から662羽が飛来し、2方向からの合計は1409羽である。他に岐阜市(西)と各務原市(南)から飛来が認められた。この方向から

表1 各鳩の場所、鳩直前集会所、鳩数とその環境

記号	鳩の場所	鳩の林相	鳩直前集会所	鳩数[羽] (観察最高値)
A	土岐郡笠原町 梅平	アカマツ 雑木林	製陶工場の屋根 工場の南の山林	2325
B	恵那郡蛭川村 和田	アカマツ 雑木林	鳩の北の山林 鳩の南の山林	1210
C	関市池尻	アカマツ	高圧鉄塔 鉄塔近くの山林	1409+α
D	加茂郡川辺町 下吉田	タケ	高圧鉄塔 鳩の北の山林	4800

の飛来数は前述の2方向と比べ少ないものであったが、確かな羽数を知り得ていない。

・川辺町の罇

この罇は、川辺町の飛騨川に沿って続く河岸段丘面の竹やぶ内にある(図1—D, 図3—Ⓡ)。罇のある地名は鶉巣と呼ばれ、カワウなどのコロニーのようなものがあったことを物語っている。現在はカラスの罇となり鳥にとって生活の条件がよいところのようである。

罇では4800羽が観察された。観察地点は、ほとんどのカラスが飛騨川に沿って飛来するため、川辺大橋付近(図3—Q)と檜原地内(図3—O)の2か所である。罇に帰ってくるカラスは、直接罇へ入らないで一度近くの集合地に集まり、日没後あたりが見にくくなった頃一斉に飛びたち、罇の上空で5分程旋回した後罇に入る。この罇に入る時刻は川辺町では、12月下旬は5時頃、1月上旬は5時20分頃であった。罇につく前の集合地を帰罇直前集合所といい、調査日および時刻によって場所が変わることが観察された。

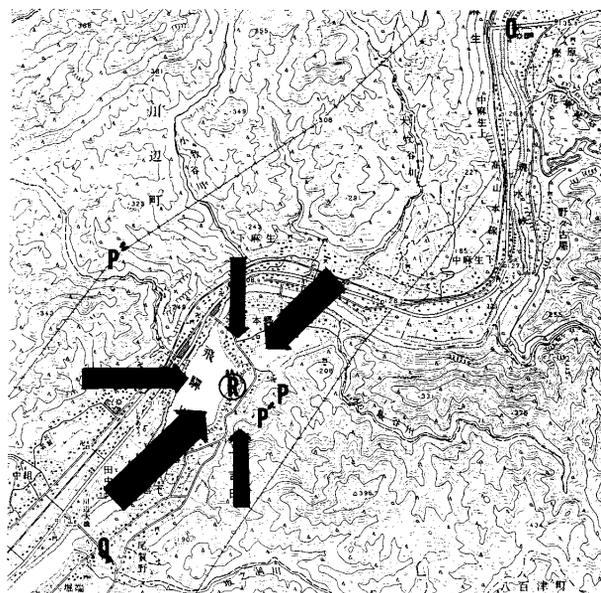


図3 川辺町の罇の位置と帰罇方向および帰罇直前集合所

(図3—P, P', P'')

表2 川辺大橋付近で観察された帰罇数

時刻	方向	帰罇数(羽)	累計(羽)	時刻	方向	帰罇数(羽)	累計(羽)
15:30	はじめから	10	10	16:25	SW	14	198
50	S	40	50	26	SW	8	206
51	N	3	53	27	N	4	210
53	W	4	57	28	SW	5	215
54	W	2	59	29	N	5	223
56	N	12	71	31	SW	4	227
59	N	9	80	33	W	6	244
〃	W	9	89	34	SW	17	250
16:00	W	9	98	36	SW	6	312
〃	SW	1	99	37	SW	7	319
〃	N	2	101	39	E	1	320
02	W	5	106	〃	SW	7	327
03	W	5	111	〃	W	2	329
04	E	7	118	40	SW	4	333
10	W	4	122	42	SW	3	336
〃	E	1	123	43	SW	10	346
13	E	7	130	〃	S	1	347
14	W	3	133	46	SW	45	392
15	S	4	137	〃	W	22	413
16	S	5	142	50	SW	9	422
18	W	7	149	51	W	2	424
〃	E	3	152	53-54	SW	236	662
19	W	5	157	55-57	SW	2	1245
20	S	6	163	58-08	SW	3004	4249
〃	SW	2	165	17:10	SW	11	4260
〃	E	5	170	11	SW	2	4262
21	SW	5	175	14	SW	7	4269
24	E	2	177	合計			4269
〃	SW	3	180				
25	E	4	184				

帰峙直前集合所への集合は、3時30分頃から始まり、5時10分頃まで続いた。その時刻毎の帰峙行動を表2に示した。この日(12月26日)は、4時58分～5時08分に3004羽の大群が飛来し、すでに帰峙直前集合所(図3-P)に集合していた群れが、この大群に触発されたかのように飛びたち、一斉に峙である竹やぶに入るのが観察された。

以上、今回の調査で、カラスの冬季峙は東濃地方・中濃地方(郡上郡、中津川市、恵南地域は未調査)から4か所が確認された。これらの峙に集合するカラスの確認できた総数は、8311羽であった。1980年における県内8か所の峙から推定された総数11500羽の約72%を占めていた。

飛騨地方・西濃地方など未調査の地域を含め、今後さらに調査を進め、県内の峙の分布と帰峙行動を明らかにしていきたい。

#### 参考文献

- 大塚之稔・坂井隆広, 1975. 岐阜市内清水山におけるカラスの帰峙調査. 濃飛の野鳥, 88: 525—526. 日本野鳥の会岐阜県支部.
- 梶浦敬一, 1980. 岐阜県内のカラス調査. 岐阜県生物教育, 24: 29—35.
- 梶浦敬一・林貴志, 1981. 奥美濃におけるカラスの秋冬就峙について. 奥美濃路の自然: 31—34. 奥濃飛越観光連盟・白山国立公園岐阜県協会.
- 窪田仁一, 1983. 西濃地方の野鳥のねぐら. 濃飛の野鳥, 185: 1550—1551. 日本野鳥の会岐阜県支部.
- 倉田篤・樋口行雄, 1972. 三重県におけるカラス科2種の就峙行動. 山階鳥類研究所報告, 6 (5/6): 89—103.
- 羽田健三・飯田洋一・香川敏明・母袋卓也・山岸哲, 1966. カラスの長野県北信部の就峙地域群について. 日本生態学会誌, 16 (5): 213—216.
- 平林浩, 1959. カラスの集団生活. 信濃教育, 869: 68—74.
- 平林浩, 1962. 山梨県須玉町津金を中心としたカラスのねぐら集合. 鳥, 17 (79/80): 123—143. 日本鳥学会.
- 細野哲夫, 1967. オナガの生活史に関する研究. 山階鳥類研究所報告, 5 (1): 34—47.
- 山岸哲, 1962. 長野県下での秋冬の峙について. 日本生態学会誌, 12 (2): 54—59.